

「立山の閻魔と地獄」

明治大学兼任講師

田村 正彦 氏

1. 立山の非日常性

「立山」という言葉が最初に出てくるのは『万葉集』の大神家持の歌である。「立山の賦 (たちやまのふ)」という題で、長い歌が一つと短い歌が二つある。その一つが、「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし (立山には一年中、雪が降っているが、いつ見ても飽きることがない。なぜなら、神が住んでいる場所だからだ)」である。『万葉集』の時代、立山は一年中、雪が降っていたことから、普通の世界とは違い、神が住む場所として認識されていたことが分かる。



ところが、仏教が伝わると、その意識は変わっていった。日常とは異なる場所という意識は残ったが、神の住む場所ではなく、地獄の世界として認識されるようになっていった。

2. 古代の立山—仏教説話から

『大日本国法華経験記』という平安時代の仏教説話の中にも、立山が登場する。この説話は立山で修行する僧の話で、立山の地獄の様子が書かれている。このことから、平安時代中期には、罪を犯すと立山の地獄に落ちるといわれていたことが分かる。

なぜ立山に地獄があって、罪を犯した日本人はそこに落ちるのか。『大日本国法華経験記』には、修行僧が立山の地獄で女の亡者に出会った話がある。この話は、立山の地獄に行けば死んだ人に出会えるということを宣伝しているのだが、出会うためには修行者 (僧侶など) が必要だということも併記している。僧侶が立山で女の亡者に会ったという話は、『今昔物語』にも載っている。こうした説話から、立山がこの当時どのような場所として見られていたのか、大きく三つの共通点を読み取ることができる。

一つ目は、歩いて行ける地獄である。現代においてあの世といえば地獄であり、落ちるところ (垂直構造) として捉えられているが、古代は歩いて行けるところ (水平構造) として捉えられていた。『古事記』のイザナギ・イザナミ神話で、黄泉比良坂 (よもつひらさか) という坂を下って黄泉国に行くことから分かる通り、古代における他界は歩いて行くところだった。それが仏教の浸透とともに垂直構造へと変わっていった。立山は、歩いて行くという古代のあの世の捉え方と、仏教の考えである地獄という観念が混じった、ちょうど真ん中のような場所だといえる。

二つ目に、死んだ人と再会できる場所であることだ。『大日本国法華経験記』でも『今昔物語』でも、亡者として現れるのは女性である。理由は定かではないが、平安時代の話なので、特に貴族の男性は自分が地獄に落ちるとは思っておらず、地獄に落ちるのは女性という意識があったのだと考えられる。

三つ目は、必ず僧侶が出てくる点である。つまり、立山の案内人が必要だったことが説

話から読み取れる。江戸時代に盛んになる立山禪定というものがあるが、恐らくそういうものが古代にもあったということがこの説話から分かる。以上が、古代の仏教説話から読み取れる立山である。

3. 中世の立山—閻魔王像から

立山の芦峯寺には、閻魔王像が伝わる。閻魔王といえば地獄を司る十王の一人だが、本当の姿は地蔵菩薩だという説もある。奈良時代の話をもとにした『日本霊異記』には、その説話がかかれていて、鎌倉時代に閻魔王のイメージができる以前、閻魔といえば閻魔王ではなく閻魔天とあって、死後の世界ではなく、安産祈願や無病息災など現世利益をもたらす天の神様としてあがめられていた。それが平安末から鎌倉にかけて、閻魔天から閻魔王へと変わっていったのだが、なぜそのように変化していったのかはまだよく分かっていない。ただ『炎魔天事』では、閻魔天を信仰していた夫婦が死後、閻魔王の裁判にかけられ、その功德によってよみがえったという説話がある。閻魔天と閻魔王の両方が同時に出てくるので、その過渡期の存在を明らかにしている。

一方、立山の芦峯寺にあるのは、閻魔天ではなく閻魔王像である。以前は南北朝時代のものといわれていたが、最近詳しい調査が入り、もしかすると鎌倉時代までさかのぼるのではないかといわれている。座った状態で 163cm というかなり大きな像が、山奥の立山に伝わっているのである。また、閻魔王像 1 体だけがあるのではなく、当時作られた他の仏像と一緒に伝わっている。それが泰山王像と伝初江王像、司命像である。泰山王と初江王は閻魔王と同じ十王の一人である。司命は、判決を下すときに亡者に内容を説明する部下である。恐らく当時は司録像という、裁判記録をする部下を加えた五尊形式だったと考えられる。実は鎌倉時代の初めごろ、閻魔王が最初に仏像としてイメージ化された形式が五尊形式だった。立山の閻魔王像はその頃の特徴と一致する。この時期の作品は、京都、奈良、鎌倉にも存在している。

鎌倉時代に作られた閻魔王像の一つが、京都の宝積寺に伝わる。立山の閻魔王像や同時期の他の閻魔王像にも共通するのだが、表情がリアルで恐ろしいこと、肩幅が広いこと、サイズが大きいことが鎌倉時代の閻魔王像の特徴である。時代が下って南北朝から室町時代になると、サイズは小型（約 100cm）になり、肩幅もだんだん狭くなる。また、五尊形式ではなく、十王と一緒にまつられるようになる傾向がある。江戸時代になると、神奈川県平塚市にある閻魔王に象徴されるように、肩幅は狭くてなで肩、胸部分に日月（太陽と月）が彫り込まれるようになる。

しかし、なぜ田舎の立山に立派な閻魔王像があるのかは分かっていない。近世、中世を通じて、立山の閻魔信仰がどういうものだったのか、文献や資料などが残っていないため、よく分からないままとなっている。だが、立山博物館の加藤基樹学芸員が面白い説を唱えている。実は立山を京都から見ると、ちょうど鬼門（丑寅／北東）の方角に当たり、その鬼門を防ぐために閻魔を祭ったのではないかというのである。佐渡島でも仏教は盛んだが、同様に京都の北東に位置しているため、鬼門を守っているのではないかという説がある。このことから、立山の閻魔堂は立山ローカルではなく、国家鎮護の境界守護を目的に整備されたのではないかと加藤学芸員は言う。

都の鬼門説でハードルとなるのは、立山という場所に当時、都の鬼門に当たるという意識があったのかということと、閻魔王が鬼門を守る存在だという意識があったのかということ 2 点である。この 2 点をクリアできれば鬼門説を証明できるが、今のところ決定的な証拠

はない。しかし、立山に閻魔王像がある理由の一つとして、鬼門説を考えてもいいのではないかと私は思っている。

閻魔王像は日本各地で祭られているが、その意味として三つが考えられる。

一つ目は、境界線を守る存在である。例えば墓地の入り口に閻魔堂を建てるがよく見られ、閻魔堂より向こうはあの世の領域と考えられていた。あるいは、江戸の宿場町に大きな閻魔王像がある。甲州街道最初の宿場町である内藤新宿には、5m もの閻魔王像が存在する。東海道の品川、日光街道・奥州街道の千住、中山道の板橋と、それぞれの最初の宿にも大きな閻魔王像が残っている。これも江戸の街の境界を守っているという意味合いが考えられる。

二つ目は、方角を守る存在である。先ほど述べた鬼門がこれに当たるのかどうかは定かではないが、江戸時代になると閻魔王に東西南北を守る意味合いが見られるようになった。例えば長野県松本市では、松本城下の東西南北それぞれに十王堂が建てられ、街を守る結界の役割を果たしていた。また、伊勢街道沿いの津城下の南側にある真教寺（三重県津市）では、悪霊や疫病よけの願いから閻魔王像が作られた。愛知県津島市にある今市場十王堂も、元々は街の東西南北にあった十王堂の一つだった。恐らく全国を調べれば、東西南北を守護する閻魔王の存在はさらに出てくるだろう。それを突き止めていけば、もしかすると鬼門を守る意味も出てくるかもしれない。

『江戸名所記』には、増上寺辺りに芝罘摩堂というものがあつたという記述がある。明治時代の『風俗画報』にも約 3m の閻魔王像が描かれていることから、明治ごろまでは閻魔王像があつたことが分かっている。増上寺は、江戸城の裏鬼門（南西）を守るために建てられたといわれる寺で、閻魔堂も同様の理由で建てられたのではないかと考えられる。また、鎌倉時代の閻魔王像が残る宝積寺は、京都の裏鬼門に当たる。このことから、閻魔王が裏鬼門を守る存在として捉えられていた可能性がある。余談だが、江戸の鬼門を守っている寛永寺には、閻魔王像は存在していない。

三つ目は、死んだ人を祭るためである。追善供養のための閻魔王像が全国各地に存在している。面白いところでは、処刑場にも閻魔王が祭られていた。鈴ヶ森処刑場という江戸の処刑場の跡地には、処刑された人たちを供養するために作られた閻魔王像が伝わっている。

4. 中世の立山—物語から

中世は、閻魔王像だけでなく、立山に根付いた物語が作られた時期にも当たる。例えば、立山の開山縁起が作られたのは鎌倉時代といわれている。また、鎌倉時代に作られた『妻鏡』には、智妙房という僧侶が悪事を働き、立山で牛になったという話がある。その様子は、立山曼荼羅の地獄谷にも描かれている。人間が畜生道に落ちる場合、普通は顔が人間、体が動物として描かれることが多いのだが、智妙房は逆に顔が牛、体が人間として描かれている。こうした人面獣は、世界中でもよく見られる。有名なところではスフィンクスなどがあるが、日本以外の人面獣は全て神聖な存在または神様として捉えられているのに対し、日本ではなぜか罪を犯した人間の姿として捉えられているのである。また、中世に作られた能の「善知鳥（うとう）」という作品も、立山を舞台にしている。鳥を捕る獵師が死後、鳥の化け物に狩られる地獄に落ち、その苦しみを訴える内容である。

立山は奈良時代から鎌倉時代にかけて、地獄の世界（非日常世界）が広がっている場所として認識されていた。一方、京都は日常的な世界という認識である。ところが、平安末

期から鎌倉時代にかけて、京都にも非日常の波が襲ってくる。『平家物語』では、まるで地獄のような光景がいろいろなところで見られるようになったという表現がたびたび使われている。巻五「奈良炎上」という章では、平家が奈良の寺を焼いた事件を描いており、多くの人々が炎に焼かれて死んでいった様子を、焦熱・大焦熱・無間阿毘という八大地獄になぞらえ、「逃げ惑って叫んでいる人の声は地獄の底の罪人の声よりひどかった」と記している。他の章でも、自然災害に襲われた様子を地獄と表現している。

当時の人たちは、目の前で人がばたばた死んでいく光景を今まで見たことがなく、表現する言葉がなかった。そのため、「まるで地獄のようだった」という言い方をしている。今は、普通に比喻として「地獄」という表現を使うが、このような言い方が出てくるのは、実は『平家物語』が最初だ。いわば比喻として地獄を引き合いに出すきっかけになったのが、戦争と自然災害だったのである。

ここで改めて京都と立山を比較すると、京都では古代、地獄は観念的なものであり、単なる仏教の教えとしてしか見られていなかった。だが、中世になると戦争と災害によって、地獄的な世界（非日常の世界）が現実にもたらされた。一方、立山はその逆に当たる。古代から目の前に地獄谷の風景が広がり、地獄が実在していたのである。そして中世には、物語という観念的なものも発展していった。

5. 近世の立山—曼荼羅から

立山曼荼羅は、江戸後期に生まれたといわれている。全体的に立山の風景を描き、その中に地獄や極楽浄土をちりばめて一つの絵にしたものである。それらを持ち歩けるように、3〜4 幅の掛け軸に分けて描かれており、全国各地を回りながら、夏になったら立山に来てほしいと触れて回るために使われていた。

そのうち最も古いといわれているのが、来迎寺の立山曼荼羅（来迎寺本）である。下部（手前）には閻魔堂や姥堂、布橋など実在するものが描かれ、上部（奥）には立山の山並み、そして右手奥には浄土が描かれている。山の中腹、特に左側には地獄の風景が描かれ、険しい劔岳は地獄の奥に描かれている。

劔岳の部分を詳細に見ていくと、立山曼荼羅では必ず中腹に塔が描かれている。この塔が何なのかは判然としない。『善知鳥安方忠義伝』という、能の「善知鳥」から着想を得た作品でも、「不思議の塔」という五輪塔として現れる。もしかすると、実際にこのような塔があったのかもしれない。また、江戸時代の登山案内を見ると、「塔（自然石）」と書かれていることから、塔に見える石があったとも考えられる。しかし、立山曼荼羅の研究者に尋ねても、この塔が何なのかは分からない。

また、劔岳には貴族のような男女が描かれている。これはイザナギ・イザナミではないか、山の神ではないかとする説もあるが、その証拠になるものはない。しかし、江戸時代の地獄絵を見ると、答えは簡単である。『往生要集』では刀葉林という地獄が説かれているのだが、これは愛欲に溺れた男女が落ちる地獄で、例えば男が木の下に立つと木の上に美女がいて手招きをする。男が木の上まで登ると、女は地上にいるので木から下りる。これを繰り返すのだが、木の葉が刀でできているため全身血まみれになっていくという地獄である。この刀葉林を劔岳に見立てて描いたとも推測できる。

立山曼荼羅の地獄谷には、『妻鏡』の智妙房や、「善知鳥」の場面（片袖を渡す男）が描かれているほか、江戸時代の地獄絵にはほぼ出てくる両婦地獄なども描かれている。両婦地獄は、近世になって日本で生まれた地獄の一つで、生前に浮気をした男性が妻と愛人の

顔をした蛇に捕らわれて、左右の顔から炎を吐かれたり髪を引っ張られたりする。そして、これが立山の地獄谷にも実際あったという記述が、『三の山廻』という紀行文に見られる。地獄谷の穴の真ん中に岩があり、左右両側から熱湯の波が押し寄せる両婦地獄のような場所（密婦地獄）があったのである。

このように立山曼荼羅では、江戸時代の地獄絵に描かれているさまざまな地獄が描かれている。例えば女性が落ちるという血の池地獄や、子どもが落ちるといふ賽の河原も描かれている。子どもと女性は、子どもや女性というだけで死後、地獄に落ちてしまうため、救済者も存在しており、それも描かれている。賽の河原では地蔵菩薩、血の池地獄では如意輪観音が該当する。

女性の地獄としては、他にも石女（うまずめ）地獄という、子どもがいなかった女性が落ちる地獄も存在し、これも曼荼羅に描かれている。この地獄では、亡者は灯心（ろうそくの芯の糸）を使って硬い竹の根を掘らなければならないが、菩薩のような救済者は設定されていない。その代わり、犬などの動物が描かれることが多く、亡者ととも竹を抜こうとする姿が描かれた地獄絵も存在する。子どものいない女性は犬などをかわいがる人が多いので、その恩返しとして竹を抜くのを手伝っているのではないかと私は解釈している。

立山曼荼羅の面白い点として、閻魔王が 2 人出てくる。一つは閻魔堂、もう一つは地獄谷に存在する。2 人出てくるのは矛盾するのではないかという見方があるかもしれないが、現在は残っていないものの、昔は実際に閻魔王が祭られていたので、そのことを表しているとも考えられる。

最近では「ヤフオク！」で、最も古い時代の立山曼荼羅が出品されたことが話題になった。これを、北陸大学で立山曼荼羅を研究している福江充准教授が落札した。ただ、描かれているものを見ると、石女地獄には犬が出てくるが、来迎寺本にはないことから、来迎寺本を後からまねて描いたものではないかと私は見ている。

6. 近世の立山—紀行文から

最後に、紀行文に出てくる立山を見ていきたい。中世の作品に、『廻国雑記』という立山を巡った僧侶の記録がある。その中に、実際に立山の三途の川に行き、「三途の川を渡るのはうれしい」と詠んだ歌がある。これは、民俗学でいう擬死再生の考えによるものである。立山の場合、地獄谷に入ることは死んだことを意味し、地獄巡りをすることで罪を償い、身を清めていた。そのため、この僧は「三途の川を渡って罪をはらうことができうれしい」と言っているのである。このような擬死再生の話は、中国から伝わった古い話にも見られる。

江戸時代には立山禪定が盛んに行われ、その紀行文も多く残されている。しかし、紀行文を見ても、肝心の閻魔信仰に関する資料は残っていない。立山禪定を記した近世の紀行文では、閻魔堂に行ったという記述がないのである。あれだけ立派な閻魔堂があつて、確かに中世には姥堂に立ち寄った記述も多少あるし、かろうじて閻魔堂を修理した記録も残っているにもかかわらず、なぜか閻魔堂に行って閻魔王像を見たという記述がない。恐らく立山禪定のルートに入っていなかったためだろう。その理由はよく分かっていない。

古くから立山が非日常の場所（地獄）として見られてきたことは明らかであり、立山に関する資料は多く存在するのだが、閻魔信仰の謎は残されたままである。